古代倭国史の再構築

認識理論と科学的方法に則って

第Ⅰ章　太陽崇拝様式「太陽の道」と歴史的変化

「蝶の雑記帳 130-1」

ⅰ．沖ノ島に宿る太陽 →「太陽の道」..3
ⅱ．1400 年代からの琉球王朝の「太陽の道」..............................8
ⅲ．弥生時代の陸の「太陽の道」..13
ⅳ．600 年代後期の朝鮮半島の「太陽の道」..............................33
ⅴ．700 年代にジャワ島で設定された「太陽の道」......................41
ⅵ．「太陽の道」がもつ特徴のまとめ..44

第一部　問題空間をつくり出す

人類は永い永い年月をかけて独自の生活の形態と様式をつくり出して今日に至った。生物としての人類がもつ家族と社会の構成の仕方の基礎の上に、外界のあらゆる自然物を生活にとりこんで、食物を獲得し、衣服・住居・それに関連するさまざまな用具・用具をつくる道具……をつくることから始めた。さらに、植物を栽培し動物を飼育するようになると、その生活様式に必要なじつに多様な工作物をつくる……というふうにして、生産活動は驚くほどに拡大するばかりとなり、今日に至っている。

人間の生活は単にモノの生産だけではない。進展し続ける生活は、家族や社会の構成の仕方まで微妙に変えて、情動や心理に影響し、理性の運用と行動にまで入りこんでいく。それは生産物と言動の形態や様式にまで現われて、文化と呼ばれるものを生み出す。人間は、それらをみな感じ・判断でき・考えることができる。

われわれが歴史と呼ぶものはそういうことを全部含んでいて、複雑に構成されているはずの全体が内部にあるのだ。だから歴史を知ろうとすればきりがない。そういう歴史のうち、わたしの生まれたこの日本列島の古代つまり古代倭国史について知りたいというのがわたしの願いである。

門外漢が手に余ることをやろうとするのだが、この第一部では、古代倭国史を解明するにはどういうことを問題とすればよいか、問題空間を構成し視点ともなるだろういくつかの“軸”を提出して、第二部で具体的な歴史を考える準備としよう。

第Ⅰ章　太陽崇拝様式「太陽の道」と歴史的変化

「太陽の道」という日本列島の太陽崇拝様式を提起した前著(1)ではアイディアを示すのに苦労した。その後、日の出と日の入りの見え方を各地点で図に描くソフトウェアの使用法を修得して理解が深まり、ほかにも理論を補強するいくつかの論点に気づいた。本書第Ⅰ章では、「太陽の道」という考えの骨格を前著よりも秩序立てて整理し解説する。

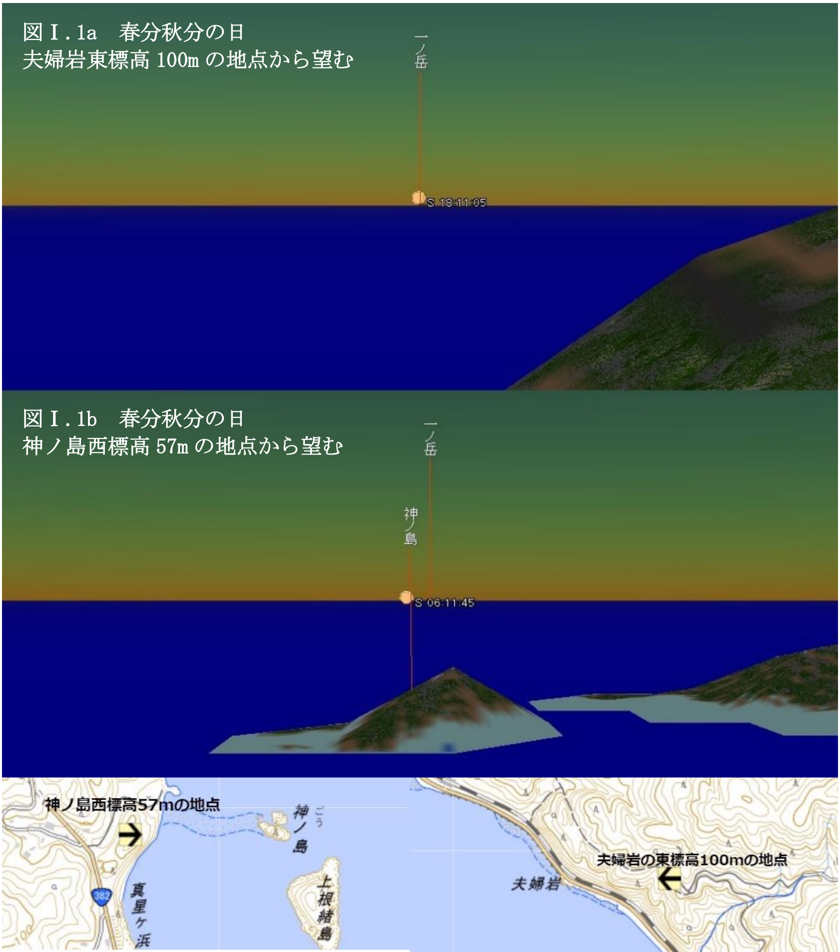
ｉ．沖ノ島に宿る太陽 →「太陽の道」

太陽は人間にとって偉大な存在である。アニミズムの心性の強かった古代にはなおさらであった。世界中の至るところに、春分や夏至や秋分や冬至の方角に特別の顧慮をはらった古代の建造物が見つかる。東アジアも例外ではない。日本列島や琉球列島や朝鮮半島の太陽崇拝は「太陽の道」と呼べる様式をもっていたことが、現代でも確認できる。

太陽の道ということばを用いるのに、初めて聞く人のために簡単に説明する必要があるだろう。そのことばは 50 年も前の書物(2,3)ですでに使われていたが、『倭国はここにあった　人文地理学的な論証』(1)が概念的により明確にした用語である。要約すれば、古代の日本列島周辺で、海辺の地先の島に日が昇り・沈むのをありがたく思うアニミズムの心性が、その島とそれを拝むのに適した岩礁などのある場所に霊性があると思いなし、さらには、特定された礼拝の場所と日の宿る島とを結ぶ直線を聖別された「太陽の道」と見立てる習慣として始まった、ということである。

「太陽の道」という概念が重要なことは、日本で特別の島と考えられている沖ノ島の場合に明確になる。本州西端の海岸各地では、一年のうちの何日かの夕方、小高いところから西方の響灘（ひびきなだ）を望むと、太陽が、広大な海原の先にある水平線上に一つだけある沖ノ島に宿るように見える。逆に対馬東岸の各地では、一年のうちの何日かの明け方、小高い

ところから東方の玄海灘（げんかい）を望むと、広大な海原に一つだけある沖ノ島から太陽が出てくるように見える。そして春分・秋分ころ、長門二見（ふたみ）の夫婦岩付近から日の入りを、対馬の神（ごう）ノ島あたりから日の出を拝めば、太陽は沖ノ島に沈み・沖ノ島から昇るように見える。その眺望を図Ⅰ.1で示そう。（この図は杉本智彦作成ソフトウェア「カシミール 3D」(4)を用い



図Ⅰ.1　太陽は本州西岸と対馬東岸から沖ノ島に宿るように見える

て描いた。メッシュの粗い標高データから描かれた図Ⅰ.1b は、二つの島からなる神ノ島を正しく再現していない。仮想カメラの焦点距離は 50mm。これ以降も同じ）。夕方と明け方に、太陽が、見渡すかぎりの海面上にポツンと姿を見せる沖ノ島に宿り・出立するかのように見えるこの眺望は、古代人の心性に格別の印象を与えたことだろう。以来現代まで日本の社会で、沖ノ島を神聖な島と見なすことが続いている。

現代人の知識からすれば、図Ⅰ.１のような光景は、沖ノ島の真東に長門二見の夫婦岩があり、沖ノ島のほぼ真西に対馬の神ノ島があるからだということが分かる。すなわち、長門二見夫婦岩・沖ノ島・対馬神ノ島がほとんど東西線上に直列しているのである。40 年余り前わたしは、文献(3)の著者水谷慶一がディレクターとして制作した NHK の番組を見て、そこで触れられなかった沖ノ島が無関係なはずはないと考えて、国土地理院の 2 万 5 千分の 1 地形図を買いこんで調べてこの地理関係に気づいたが、約 40 年後の著書(1)で、先行の書物(2,3)の使っていた語を復活して、長門二見夫婦岩—沖ノ島—対馬神ノ島を結ぶ東西線を「太陽の道」と名づけた。現代では国土地理院地図は電子化されてはるかに詳細に緯度と経度を知ることができる。沖ノ島の一ノ岳三角点は北緯 34.244267 度に位置し、標高 243.5m である。長門二見の夫婦岩は北緯 34.2427 度にあるが、広さをもつ沖ノ島の緯度の範囲（34.240～34.249 度）内にある（長門二見の夫婦岩から沖ノ島までの距離は 74.8km）。対馬神ノ島のピークは北緯 34.251957 度に位置する。緯度の差 0.001 度は南北の距離にして約 111m に当たるから、神ノ島・沖ノ島間の距離 72.2km に対して南北方向のずれは 850m ぐらい。神ノ島と沖ノ島は、自然の偶然としてはとてもよい精度で東西に並んでいるのである。

図Ⅰ.1 下段の地図では省かれているが、実は、根緒島は上下二つの島からなり南側の標高の高い下根緒島の緯度は 34.244～34.246 度で沖ノ島の緯度に重なるから、二つの根緒島を標識と見立てることもできた。

けれども、それよりもずっと小さな二つの島からなり夫婦岩と見立てることのできる神ノ島の方が太陽の道の標識に選ばれた、と考えることができる。現代ほど科学的知識にうるさくなかった古代人には、図Ⅰ.1 に見られる春分秋分の日の視角のわずかなずれは無視できて（数日の内にそう見えるのだから）、太陽がその方向に一つだけある沖ノ島から昇ってくると想像することができたのだ。そうして、東西にある夫婦岩が太陽の宿る沖ノ島を通る東西線を聖別していると考えて、東西の夫婦岩を遥拝所とし神聖な沖ノ島への日の入りとそこからの日の出を拝む「太陽の道」という観念が芽生える。

海辺からほかに何も見えないほど広い海域に一つだけ小島があって、その島の東西の陸地から見ると、夕方に太陽がその島に沈み、明け方に太陽がその島から出てくるような条件を備えた場所は、世界中探しても数は多くないだろう。このめずらしい自然条件が、日本列島で独特な太陽崇拝の様式である「太陽の道」を生み出した、とわたしは考える。すなわち、あとで示す図Ⅰ.5 に見られるように、響灘（ひびきなだ）・玄海灘（げんかいなだ）の海域に暮らした古代人のあいだに、長門二見夫婦岩―沖ノ島―対馬神ノ島（夫婦岩）の東西線を「太陽の通る聖別された道」と見立てる観念が形成された、と。そうすれば、現代まで続く沖ノ島崇拝の由来を納得して理解することができ、さらに以下で示すように、日本各地でみられる太陽崇拝の様式を、沖ノ島を典型例とする「太陽の道」という概念で説明することが可能になる。

ここで、沖ノ島を通る「太陽の道」を聖別する東西二つの夫婦岩のほかに、重要な付随物がないか調べてみよう。図Ⅰ.1 では沖ノ島を観察可能な海岸近くの小高い場所から見える日の入りと日の出を示したが、沖ノ島を神聖な島と考える心性は太陽の宿るその島をもっと知りたいという気持ちにさせるだろう。沖ノ島をもっと観察するには近くの高い山に登ればよい。長門二見夫婦岩の東南東 6.3km のところに標高

616m でこのあたりで最も高い狗留孫（くるそん）山がある。今では山中に真言宗の寺があり、狗留孫という山名が仏教の影響を受けたことを示している。弘法大師が筑前沖からその山が光るのを見たという伝承が玄海灘から見える名の知れた山だったことを教えるが、仏教伝来以前の名は何だっただろうか。実は、山口県周辺では御嶽（おだけ）と呼ばれ、関西の人も御利益（ごりやく）に感謝して大金を寄付するほど崇拝を集めている。寺の建てられている場所には大きな陰陽石がある。陰陽石は、夫婦岩とも見なせ、別のことばで言えばアニミズムの磐座（いわくら）である。これらのことは、この御嶽が、仏教伝来以前の古い時代からの霊所と考えられていたことを示唆する。山上から太陽の宿る神聖な沖ノ島を眺望できるこの御嶽（おだけ）は、「太陽の道」の重要な構成要素であったことが、以下の議論で納得できるだろう。

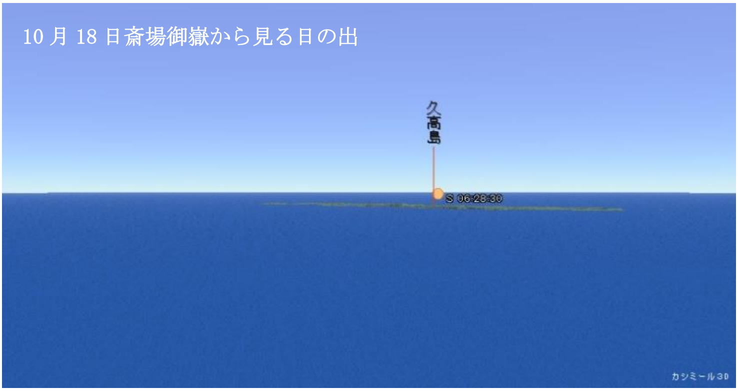
沖ノ島は、考古学的な調査で出土した土器や石器などから、縄文時代から古代人が上陸して漁業基地とした、また、出土した細形銅矛から弥生時代には祭祀場でもあった、と考えられている。つまり、沖ノ島は古い時代から霊所と見なされた、と考えてよいだろう。このように、沖ノ島を取り巻く本州西岸・九州北岸・壱岐・対馬の人々がこの島になじんでいたことが、上で考察したような「太陽の道」という観念を生みだす条件となったことだろう。沖ノ島は世界遺産「神宿る島・・・」の中心的要素として登録されたが、上で考えた「太陽の道」は、現代の日本人がたいていそこに宿る神の正体を知らず太陽神とは別の神の名を挙げて語ることに疑問を突きつける。

日本列島で太陽の宿る島として最も名高い沖ノ島で、典型的な「太陽の道」という観念がどのようにして生まれたかを見た。太陽の道を特徴づける要件を番号づけて挙げれば次のようになる。すなわち、① 太陽の道という観念は、地先の岩礁や島からの日の出と日の入りをありがたく思うアニミズムの心性から始まった、② 太陽の道は、日の出と日の入りを印象深く見せる自然物を標識として指定され、海岸で標識と

なる陰陽石や対の島を夫婦岩あるいは神ノ島と呼んだ、③ 夫婦岩のある海岸の背後にあって見晴らしがよく磐座と見なせる陰陽石のある山を御嶽(おだけ)と呼んで、太陽の道の要件に加えた。

ii．1400 年代からの琉球王朝の「太陽の道」

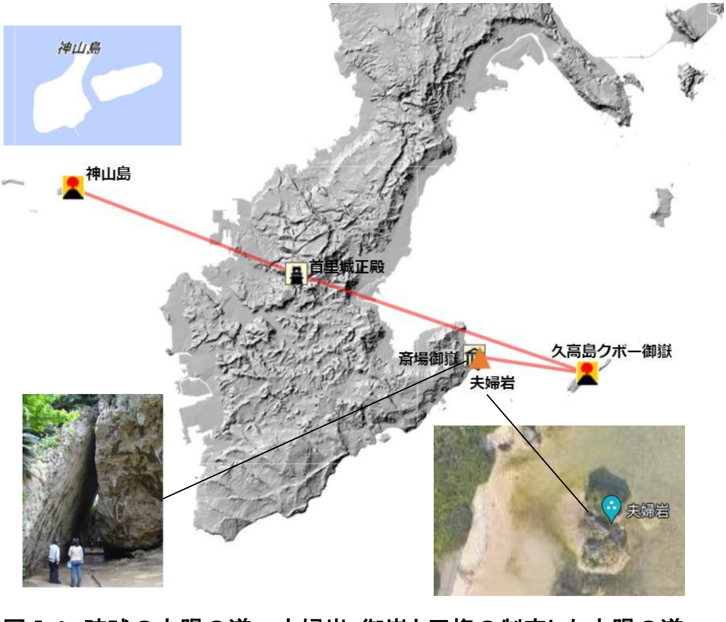
第ｉ節で考察した「太陽の道」という観念を確証する事例を、文明のずっと進んだ後世の琉球に見出すことができる。琉球列島には沖縄本島南部知念半島の東の海にある久高(くだか)島のクボー御嶽(うたき)が太陽神が宿る穴だという伝承あるいは信仰がある。その久高島から昇る朝日を、知念半島の山中にある「斎場御嶽(せいふぁうたき)」からソフトウェア「カシミール 3D」で仮想的に撮影したのが図Ⅰ.2 である（仮想カメラは地面から 1.5m 上に設置）。



図Ⅰ.2　斎場御嶽から久高島クボー御嶽を望む

斎場御嶽は、首里城跡とともに世界文化遺産に登録されているが、そこには図Ⅰ.3 左下の挿入写真に示すように二つの寄り添う巨大な陰陽石が立っている。この陰陽石は、夫婦岩と呼んでもおかしくないが、あとで示すように長門二見夫婦岩の東南にそびえる御嶽(おだけ)にある陰陽石よりも大きい磐座と見なすことができる。斎場御嶽から海岸に降り立つと三つの大岩が立っている。前には見逃したが、グーグル・マップを見

ると図Ⅰ.3 の右下の図が示すように、その大きな巌は「夫婦岩」と呼ばれていることが分かる。琉球の夫婦岩は長門二見の夫婦岩に対応し、斎場御嶽（うたき）は長門二見夫婦岩の東南にそびえる御嶽（おだけ）に対応して、斎場御嶽あるいは海岸の夫婦岩から東方約 7km にある久高島クボー御嶽に昇る朝日を拝むことができるのである。くりかえせば、沖ノ島へ宿る太陽を拝むのに長門夫婦岩と御嶽の二つの礼拝所があるように、琉球にも、宿っていた久高島から太陽が出てくるのを拝む夫婦岩と斎場御嶽の二つの礼拝所があるのだ。一方は日の入りで他方は日の出で、発音が微妙に異なるとしても、夫婦岩と御嶽というセットが太陽の宿る島に結びつけられている。こちらでも、沖ノ島を通る太陽の道にあった要件①から③が満たされている。九州の太陽の道という観念が琉球にもちこまれたにちがいない。



図Ⅰ.3　琉球の太陽の道：夫婦岩・御嶽と王権の制定した太陽の道

山の上の斎場御嶽と海岸の夫婦岩が標識となる「太陽の道」という観念は、古い時代に琉球に伝播し信仰にまで高まった。1400 年代に成立した琉球王朝は、政治とその信仰を合体させて祭政一致の制度的体制を整える。「太陽の道」の祭祀と儀礼は次のようなやり方で定式化された。琉球王朝では、王と王族の巫女(みこ)である「聞え大君(おおきみ)」が、そこにも小さな御嶽(うたき)のもうけられた首里城宮殿から斎場御嶽と久高島に詣でるのが重要な神事であった。

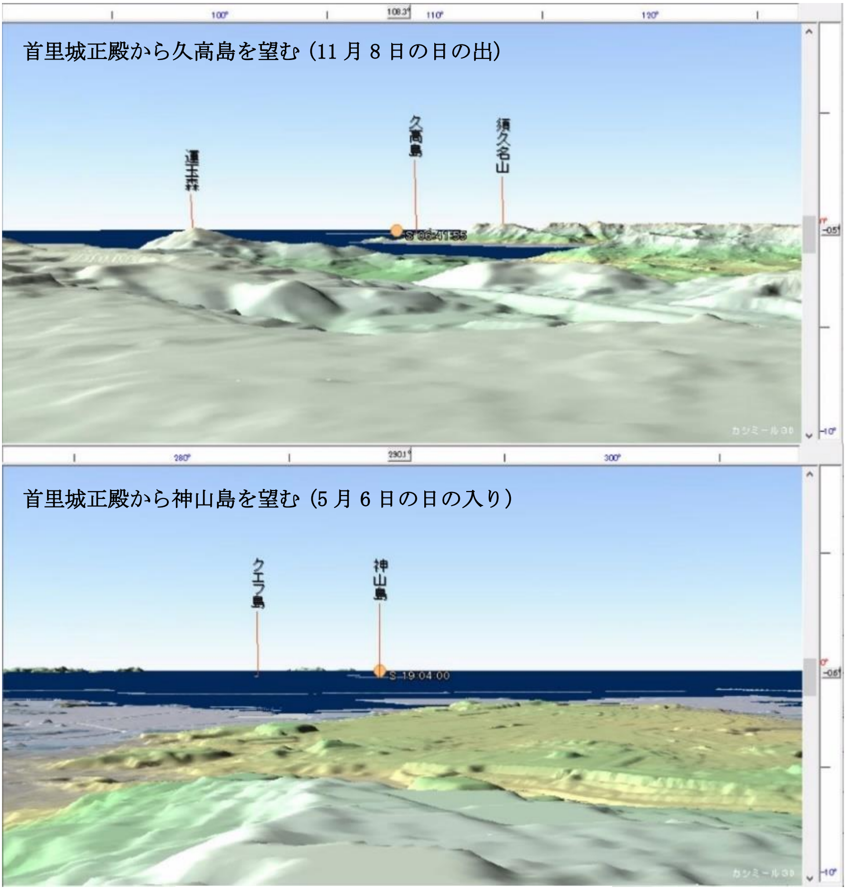
そこで、久高島クボー御嶽から首里城正殿へ直線を延ばしてみると、その延長上の沖縄本島西の海に神山島という島がある。図Ｉ.3 の左上の地理院地図の拡大図が示すように、神山島は二つの島からなる。つまり神山島は、対馬の神ノ島と同じく大きな夫婦岩と見立てることができるのである。

これは偶然ではない。首里城は人工物だから、久高島クボー御嶽・首里城正殿・神山島が直線上に並ぶのは人為的にそうされたということだ。その直線は東西方向にないが、沖ノ島を通る「太陽の道」と同じく直線の配列になるように首里城正殿の位置が設定されたことを示している。すなわち、王によって公式の「太陽の道」が制定されたのである。琉球王朝でのこの歴史的事実は、うしろの章で示すように古墳時代に建てられた沖ノ島を遥拝する宗像大社に勅使が参拝していたことに対応する。これらの事実は、「太陽の道」崇拝が実際に過去にあったことを証明している。さらに、図Ｉ.3 に引用した地理院地図の地形を詳細に見ると、首里城正殿は、久高島クボー御嶽―神山島を結ぶ直線上で標高の最も高い場所に築かれたことが分かる。この事実も、琉球王朝がこの太陽の道を人為的に制定したことを明らかにしている。

さて、図Ｉ.3 が教えるように斎場御嶽を通る太陽の道は東西に整列していないので、太陽が久高島クボー御嶽から昇るように見えるのは、沖ノ島を通る太陽の道と異なり、春分秋分の日ではない。図Ｉ.2 に示

したように、朝日がクボー御嶽から出てくるように見えるのは 2024 年には 10 月 18 日ころと、冬至を過ぎて年があらたまってからである（昼間の眺望図に日の出を追加してある）。

　こんどは図Ⅰ.4 に、首里城正殿から久高島から昇る朝日と神山島に沈む夕日がどのように見えるかを示そう（カメラは標高約 130m にある首里城正殿の地面から 4m の位置に設定してある）。この仮想写真は、首里城正殿の二階からなら久高島クボー御嶽がこの図のように見通せ



図Ⅰ.4　琉球王朝の制定した太陽の道

ることを教えている。図Ⅰ.4 では、昼間の眺望に日の出と日の入りを加え、太陽が久高島クボー御嶽から昇るように見える日と、神山島に沈むように見える日が記してある。判読がむずかしいけれども、図の上に記された数字は北の方向を 0 度として時計回りの角度で方角を示し、右側の数字はカメラの仰角を示している（以下同様）。王権によって制定された太陽の道は直線だけれども、王と「聞え大君」が首里城正殿から久高島クボー御嶽からの日の出と神山島への日の入りを遥拝するのは別々の季節である。それぞれ、一年のうちに図Ⅰ.4 に示した日と別の日の二度そう見える。

インターネット上に、“冬至の日に首里城や斎場御嶽で見ると朝日が久高島から昇るように見える”という誤解を与える表現がある。しかし正確に言えば、クボー御嶽から見て異なる方角にある二つの場所から、同じ日にクボー御嶽あたりから日が昇るようには見えない。図Ⅰ.4 は小さすぎて日の出の時間も書きこまれているので詳細が見分けられないが、首里城正殿から遠望すると、11 月 8 日をすこし過ぎたら、朝日は知念半島の山々にさえぎられて久高島から昇るようには見えない。再び久高島から昇る朝日が見えるようになるのは冬至後の２月になってからである。

もちろん、「太陽の道」という観念体系では春分・夏至・秋分・冬至は重要な日であった。冬至だけではなく二至二分の日には、朝日が久高島から昇るように見えなくても祭事が行なわれたと推定される。実際、首里城が 2019 年に消失する以前に上空から撮影した写真では、首里城正殿前庭は鮮やかな縞模様で彩られ、正殿階段から真西の奉天門へ向かう通路も別の色で描かれている。その先には、首里宮城の祭祀場である「首里森御嶽（うたき）」があるから、春分秋分にはそこで祭事が営まれたはずである。さらに、図Ⅰ.4 が示すクボー御嶽から朝日が昇るように見える日と神山島に夕日が沈むように見える日にも首里宮城で祭事が行な

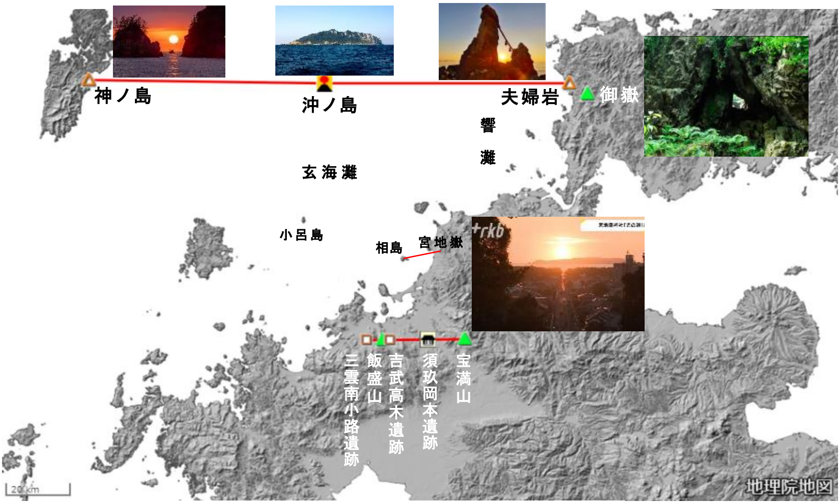
われた、と推測することができる。ヨーロッパ人がその海域に出没するようになってからは、望遠鏡を用いてその日の日の出をはっきり見ることができただろう。

前節ⅰとこの節ⅱによって、古代人のアニミズムの心性から生みだされた太陽崇拝の様式である「太陽の道」という観念体系が過去の社会で現実に存在した、と確認できた。この観念体系は古代倭国の歴史事象を探求するとき重要な視点を提供する。

先に挙げた①～③が確認されるが、この節ⅱから太陽の道について次のような要点を加えることができる。ただし、弥生時代を考察する次節ⅲで抽出する太陽の道の要件の番号づけとつながるような番号づけにする。⑧ 王が出現すると太陽の道を公的に制定し主宰した、⑥´王は宮殿をその太陽の道上に置いた、⑨ 王家の女性が太陽の道にまつわる宗教的儀礼においてシャーマニズムでいう巫女の長を務めたことである。⑩ 時代が進むと、「太陽の道」という観念は国家統治の一翼を担い、祭政一致の国家制度をつくりだした、と言える。

ⅲ．弥生時代の陸の「太陽の道」

上で挙げた要点を、原型となる沖ノ島を通る太陽の道という観念が生まれた領域にもどって確認しなおそう。図Ⅰ.5 に、沖ノ島を通る太陽の道という観念を共有した領域の地形図を掲げ、第ⅰ節で示さなかったこちらの太陽の道を構成する要素の画像を添付する。画像が小さくて見えにくいけれども、長門二見夫婦岩が、大海原の向こうに沈む太陽を拝むことのできる卓越した夫婦岩であることが知られるだろう。神ノ島もまた、対になった島のあいだの水平線から昇る日の出を拝むという印象深い光景を提供する。第ⅰ節で述べたように古代人たちは沖ノ島になじんでいたのだが、そこが太陽の宿る島だという通念が形



図Ⅰ.5　海上の太陽の道と陸の太陽の道

成されると、その外観から沖ノ島を天岩屋（あまのいわや）と表現することが起きたと考えることもできる。

言い足しておけば、伊勢にある夫婦岩からは、東方にある島々のうち大きな答志島にさえぎられて伊良湖水道にある神島は見えないし、その夫婦岩の南にある小山の頂上 110m に登っても神島は直視できない。また、こちらの夫婦岩と神島は東西に並んでいない。長門二見夫婦岩と対馬神ノ島のように海上に浮かぶ沖ノ島を見通す、あるいは、斎場御嶽と海岸の夫婦岩とから海上のクボー御嶽を見通すというような、それを特別な標識とする条件は存在しない。伊勢夫婦岩と神島を関連づけて、海岸から地先の島に昇る日の出を拝む太陽の道という観念は生まれなかったと考えるのが妥当である。さらに言えば、伊良湖水道にある神島は、対馬の神ノ島や沖縄の神山島とは異なり一つの島である。

調べると、伊勢国の夫婦岩のある地域の旧郡名は渡会（わたらい）で、二見という町名は明治になってできた。今では夫婦岩と呼ばれているが、立石という固有名があってそちらの方が古いらしい。そこの興玉（おきたま）神社の祭神は猿田彦と宇迦（うか）神だ

が、興玉という神社名に結びつく地名はあたりにない。それに対し、長門国豊浦郡の夫婦岩をふくむ広い範囲の大字名は宇賀(うか)で、そこに二見・矢玉という地名が存在していた（ほかにも玉のつく地名がある）。この状況証拠も、長門二見の夫婦岩の方が歴史的に古いと証言する。

だから、二つの巖(いわお)からなる夫婦岩と二つの島からなる神ノ島を太陽の道の構成要素とする太陽崇拝の様式は、伊勢地方ではなく、図Ⅰ.5 に示す領域で始まったと結論することができる。

①をくりかえせば、太陽の道という観念は、海岸から地先の小島に昇るあるいは沈む太陽を拝むことから始まったのであるが、図Ⅰ.5 の領域に、見栄えがしてなるほど太陽の道だと思える実例を見出すことができる。図中に赤い線で結んだ福岡県の宮地嶽(みやじだけ)と沖合の相島(あいのしま)である。挿入した写真は、現在の宮地嶽神社の石段の最上段からまっすぐ海に向かう参道の先にある相島に沈む夕日を映したものである。写真のような光景が観察できる毎年 2 月下旬と 10 月下旬（宮地嶽—相島を結ぶ線は、斎場御嶽—久高島を結ぶ太陽の道と同様東西方向を向いていない）には、おおぜいの見物客が予約してこの“光の道”を見るために押しかけるそうだ。この光の道は、①の素朴な様式と見なすことができ、それを宮地嶽と相島とを結ぶ太陽の道と呼ぶことができる。

海岸まで続く道は、九州の箱崎八幡宮などで行なわれる「お汐井(しおい)取り」（祭礼の日に岸辺の海水の沁みた砂を採取する）に向かう道で、神社が建てられた以後に今のようになったのだろう。初期には南西に長い弧を描く砂浜から相島に沈む夕日を拝んでいたのが、その海岸域で眺望のよい宮地嶽の山すそが夕日を拝むのに適しているとして選ばれたのだろう。現代人に言わせればそれはこじつけだが、古代人が霊所と見なせる磐座か泉かを見出したのだろう。御嶽に似た宮地嶽という名がそれをほのめかしている。

宮地嶽と相島を結ぶ線を原初の太陽の道と見なすことができる。そ

うすると、宮地嶽—相島間の太陽の道は、斎場御嶽—久高島間の太陽の道のもっと素朴な様式ということになり、スケールの大きな長門二見夫婦岩—沖ノ島—神ノ島を結ぶ太陽の道は、図Ⅰ.5 の領域で始まった太陽の道という観念がさらに整った様式に発展したもの、ということになる。この見方は、第ⅱ節で議論したように、近世に現実に機能した久高島クボー御嶽—首里城正殿—神山島間の太陽の道によって確証される。

ところで長門二見の夫婦岩では、二つの岩に張り渡したしめ縄だけがそこが霊所であることを表現している。山がせまり国道と鉄道をやっと通すことしかできないその海岸の自然条件がそうさせたとも見えるが、小さな社（やしろ）さえないそのあり方が原初のあり方だったとわたしは推測する。北にある長門二見の集落には若宮神社というのがあるが、祭神は大雀命（おおさざきのみこと）で夫婦岩の体現している霊性と結びつかない。地先の島に昇る朝日を拝むという元来の太陽の道のあり方からすると、初期の太陽の道には社殿がなかった、と考えるのが妥当だと思う。だから、相島への日の入りを拝む霊所となった宮地嶽でも初めのころ社殿はなくて、何かの自然標識しかなかった、と上では考えたのである。

長門二見夫婦岩—沖ノ島—神ノ島を結ぶ太陽の道は、もっとあとの時代に確立したと考えるべきだろう。それが東西に直列していると考えつくには、春分・秋分の知識がなければならないから。二至二分は季節の移り行きを教えるのだが、図Ⅰ.5 の領域で人々がそれをはっきり知るようになったのは、その知識が必要な稲作が始まって以後のこととするのが妥当だろう。そう考えると、長門二見夫婦岩—沖ノ島—神ノ島を結ぶ東西線「太陽の道」という観念は、弥生時代になってから確立したことになる。

素朴な太陽の道という観念にさかのぼったついでに、考察を神話つ

まり古代人の想像に及ぼしてみよう。神話はアニミズムの精神がつくりあげたフィクションである。それに踏みこむと議論は漠然となり、科学的方法をめざしている本書を危険に陥れかねない。しかし神話には、説話をつくった社会の心性と文化がにじみ出ており、記録されるようになったときには文明社会の歴史が反映されている。とりわけ日本神話は、記録のされ方が歴史をたぐりよせる条件をもっている。

古い中国大陸の文明よりもずいぶん遅れて発展した日本列島では、神話がつくられるのも遅くそれが記録されるほど社会が成熟するのも遅れた。そして、神話と歴史は、記録の国中国を手本にして中国の古書にないほど整然とした体系的な書き物『古事記』と『日本書紀』に記録された。当時の国家が編修した『記・紀』は、上巻の神代（かみよ）に神話を、続く巻に人の代（よ）の歴史を記載したが、その神話と歴史は、編修した国家の正統性を主張するように記述されている。人の代の先頭に書かれているのは奈良盆地の首長家の始祖の物語で、始祖王は、神話の神々の子孫、なかでも中心にすえられる太陽神の子孫であるとされる。したがって、ここまで議論してきた「太陽の道」は、倭国の歴史を考察するうえでとても重要な概念となる。その始祖王は九州から奈良盆地に侵入してきたと書かれ、始祖王以後の記述でもその王統の出自が九州にあることが述べられているが、このことも銘記すべき要点となる。

しかも、祖先神を語る神代の神話でも、神話の舞台が奈良盆地であると思わせる説話はほとんどない。一例を挙げれば、『日本書紀』は、太陽神（の三人の娘）を祀る宗像大社のところで、『一書』を引いて、その神ははじめ宇佐に降り次に海北道中の沖ノ島に祀られたと記述し、筑紫の水沼（みぬま）でも祀られていると書く。この記述から、次のような論点が浮かび上がる。第一に、『日本書紀』を編修した奈良盆地の王統は、そこに書かれた九州の三か所以外に奈良盆地でもその神を祀っていると追加することができたのにそれをしなかった点である。つまり、『記・紀』の記述する神話は九州ですでに出来上がっていた、ということであ

る。第二に、その神話がいくつもの『一書』から引用されている点である。それは、日本神話が九州ですでに何度か記録されていたことを証言する。

一般に、神話がつくられるのはある社会に一定の文化が形成される段階で、それが記録されるのはその社会がさらに発展して一定の文明段階に進んでから、と言えるだろう。したがって『記・紀』は、奈良盆地の始祖王よりも以前に、九州地方が日本神話を記録する文明段階に進んでいたことを暗黙のうちに承認しているのである。このことと上の段落で述べたことを日本古代史の研究者たちは無視しているが、これらは、日本古代史を論じるのに基本的に重要な論点となる。本書はこの視点を採用する。

『記・紀』神話に挙げられた太陽神（の三人の娘）を祀る三か所の神社は、あとで示すように図Ⅰ.5 の地図中にある。この地図のなかに日本神話の説話の舞台があると言っても言い過ぎではないだろう。太陽の道の様式に歴史的進展があるように、神話も歴史的に段階を踏んで整理されたと推測することができる。『記・紀』神話では高度な抽象化がなされていて、神々は、造化の三神等—神代七代の夫婦神—日・月・海・山等と体系的な系統的関係に整理されている。そのうち神代七代最後の夫婦神イザナギ・イザナミが、国を生んで、さらに日・月などを生み、日の（霊である）神が王統の祖先神であるとされる。ギリシア神話でもそうだが、説話にはヴァリエーションがあるけれども、神々は神話を作りだした領域の土地に結びつけられて語られるから、神話の説話を地図Ⅰ.5 に結びつけて考えるのは意味があるだろう。

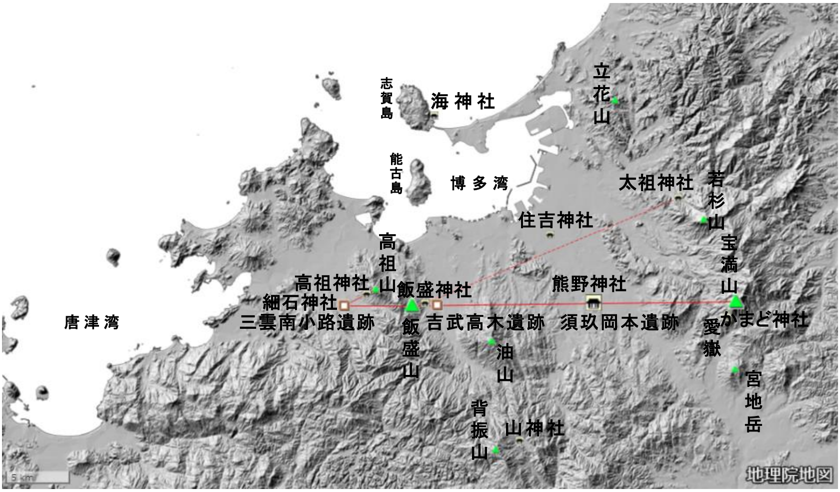
試みに、ちょっと日本神話に付き合って、日の神の親神イザナギ・イザナミの国生み説話を考えてみよう。『記・紀』は、“イザナギ・イザナミが混沌とした地上を矛（ほこ）でかき混ぜたら、しずくが落ちて淤能碁呂（おのころ）島ができた”と語る。西日本各地でおのころ島は当地にあるこの島だと主張しているが、

> それは書き物『記・紀』を下敷きにした伝承の可能性が高い。ここまでの考察からすると、おのころ島は図Ⅰ.5 の領域のなかに想定された蓋然性がはるかに高い。実際、地図Ⅰ.5 の真ん中に小呂島（おろのしま）が見つかる。語呂合わせと言われればそれまでだが、これほど語呂合わせのできる島があり、さらに周囲に大八島（おおやしま）のうちで古代から重要だったはずの九州・本州・対馬・壱岐などが見える地理的条件をこれほど備えたところは、西日本中を探してもないだろう。小呂島からなら、あとでイザナギ・イザナミが生む太陽の宿る沖ノ島も見えるのである。閑話休題。

図Ⅰ.5 には九州島内にもう一つ赤い東西線が描かれている。本書は、この東西線が弥生時代に陸地に設定された「太陽の道」だと提案する。その拡大図を図Ⅰ.6 に示す。こちらの陸の太陽の道が古代に崇拝されたことを証言するのは、考古学が発見した弥生時代の遺跡である。

図Ⅰ.6 が示すように、三つの弥生遺跡、福岡平野の南に位置する須玖岡本遺跡・吉武高木遺跡と糸島市の平地の南に位置する三雲南小路遺跡が、東から真西へ、福岡市と糸島市を区切る高祖山連峰を越えて直列している。これら三つの遺跡の重要性は考古学の調査が明らかにしている。それについて、かなりのことは前著[1]に記述してあるから、本書では記述が長くなるのを避けるために省略しよう。ただし、三つの遺跡が驚くべき精度で東西に直列していることは本書にとって重要な実証的証拠だから、まずそれを示そう（ここまでもそうだったが、緯度や距離の数値をインターネット上の地理院地図から求めるとき、マウスをつかって画面上のある地点を指すとき操作のたびに誤差はまぬがれない。三つの遺跡の緯度については、前著[1]を踏襲して少し粗い数値を用いる）。

現在須玖遺跡群と総称される区域で、複数の甕棺墓が保存されている場所が目立つが、区域の北端で明治期に巨石下甕棺（かめかん）墓が発見されて以前はそれが須玖岡本遺跡と呼ばれていた。巨石下甕棺墓は、出土物の散逸によって詳細が分からなくなっているが、前漢鏡約 30 面・銅剣・



図Ⅰ.6　弥生時代の太陽の道

勾玉（まがたま）の三種の神器ほかガラス璧・銅剣・銅戈（か）など多数の副葬品が出土し、王墓と目（もく）された重要な遺跡である。ここで須玖岡本遺跡と言っているのはその巨石下甕棺墓を指す。考古学者は神社を軽視するけれども、本書は、ここまでしてきたようにアニミズムの遺跡とも言うべき神社を考慮に入れて、須玖遺跡群の中心部東寄りにあって境内に古墳もある熊野神社にも注目する。そして、半径 100m ばかりの須玖遺跡群の場所を熊野神社の社（やしろ）の位置で代表させよう。社は北緯 33.5390 度にある。

西の吉武高木遺跡でやはり三種の神器などが出土して“最古の王墓”と目された木棺墓出土地と隣接する建物遺跡の緯度を調べると、北緯 33.5374 度である。吉武高木遺跡は室見川左岸の河岸段丘で見つかったが、現在その一帯は田園で神社は西方の飯盛山のふもとにあって飯盛神社と呼ばれている。その飯盛神社にはかつて下宮・中宮・上宮があった。標高約 337m の上宮跡の緯度を測ると北緯 33.5375 度である。

糸島市の三雲南小路遺跡では、墳丘をもつ方形周溝墓に二つの甕棺が接して埋められているのが発見された。そこでも、前漢鏡多数・ガラス勾玉３個・銅剣の三種の神器などの副葬品が出土している。周溝墓の

位置は北緯 33.5367 度だが、すぐ隣の北緯 33.5371 度の場所に細石神社がある。細石神社の位置の方が重要な意味をもつことはあとで判明するだろう。

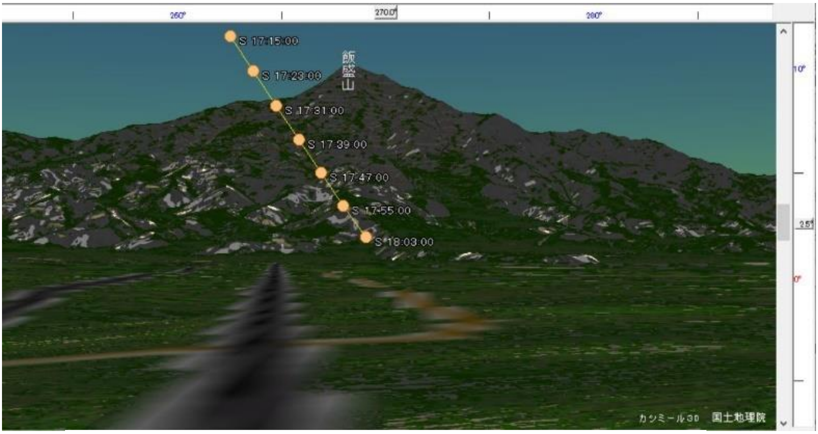
上での説明にしたがって整理すると、須玖遺跡群の中心に位置すると言える熊野神社は北緯 33.5390 度に、吉武高木遺跡が北緯 33.5374 度で飯盛神社上宮が北緯 33.5375 度に、三雲南小路遺跡が北緯 33.5367 度で隣りの細石神社が北緯 33.5371 度に位置する。三つの遺跡は驚くほどの精度で東西に直列しており、また、それぞれの遺跡に付随すると考えられる社（やしろ）も同様に東西に直列しているのである。三つの遺跡も三つの神社も古代そこにあった共同体が遺したものすなわち人為的な物で、それらが東西に直列するのは偶然ではありえない。そして、神社はアニミズムに関係していると考えられるから、ここまでの文脈に照らして、図Ⅰ.6 に示したこの東西線を「太陽の道」と呼ぶことができる。

この太陽の道が弥生時代に設定されたことを、三つの遺跡の出土物が証言する。遺跡は共同体の首長すなわち王の墓だと見なされるから、④ 王を霊的な「太陽の道」上に埋葬しようとしたのだ。それは、中世の琉球の太陽の道の特徴として挙げた⑨がこの弥生時代に始まったことを教える。また、⑤ 古代人のアニミズム的心性が霊を祀る社（やしろ）を「太陽の道」上に築こうとした、と考えられる。さらに、吉武高木遺跡の発掘調査は王墓の近くに庶民の住居と異なる建物群を見つけているから、⑥ 王は住居を「太陽の道」上に築くことを志向したことが判る。

図Ⅰ.6 に示した東西線が陸の太陽の道であることを確認するために、三つの遺跡のある場所から日の出と日の入りがどのように見えたか、ソフトウェア「カシミール 3D」(4)を用いて描いてみよう。

まず、吉武高木遺跡の最古の王墓と目されるところから春分・秋分の日に西の飯盛山に沈む夕日はどのように見えたかを、図Ⅰ.7 に示す。

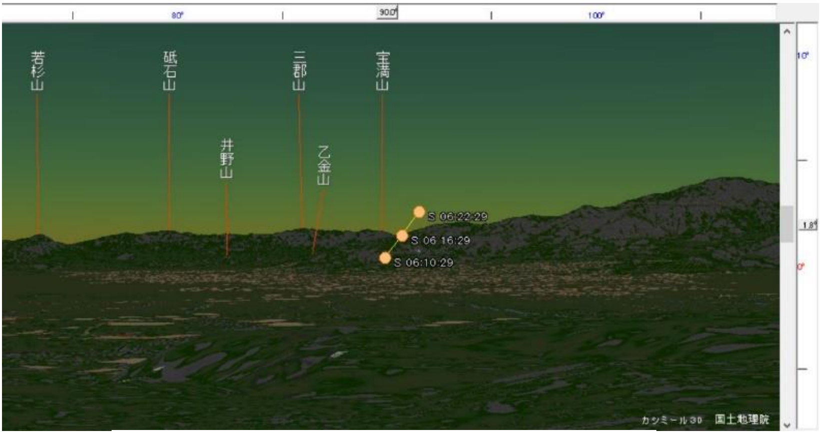
古代人は、その日の入りを目で追って外挿し、太陽が飯盛山の根元に入っていった、と想像することができただろう。そして、春分・秋分の知識から、吉武高木遺跡の場所と飯盛山が東西に直列している、と理解したはずである。



図Ⅰ.7 吉武高木遺跡から飯盛山を望む（春分の日の入り）

それを知れば、東方に何があるか知りたいのが人情である。吉武高木遺跡の場所から日の出はどのように見えるだろうか。カシミール 3D を用いて描いてみても（その図は省略する）、東南にある油山の北に延びる山すそにはばまれて真東の方角に目立つピークは見えず、印象深い日の出の光景とはならない。それは、吉武高木遺跡の場所が河岸段丘にあるとはいえ、標高が低いからである。そこで西の飯盛山の方へ坂道を上がって行き、現在の飯盛神社の社殿（下宮）がある場所に仮想カメラを据えてみよう。すると、図Ⅰ.8 のような眺望が得られる。真東に宝満山という山があり、春分秋分の日の太陽がその山の根元から出てくるように見える。標高 382m の飯盛山の頂上に登ると、ほかの山の峰が見えて向こうの山々のもう少し詳しいようすが分かるけれども、図Ⅰ.8 以上に日の出の印象が高められることはない。

だがあきらめてはいけない。その宝満山に登ってみよう。すると、そ

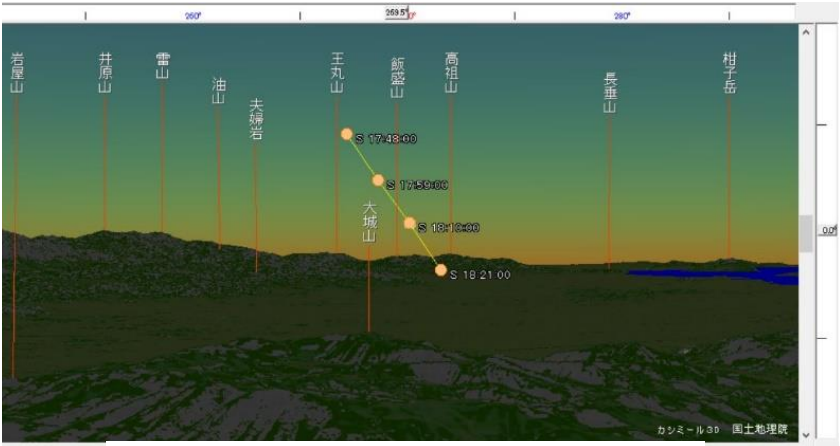


図Ｉ.8　飯盛神社から真東を望む（春分の日の

の山が福岡平野を取り巻く山々のなかで最も高く（約 830m）、頂上が岩におおわれている、それも、福岡平野をとり巻く山々のなかで最も巨大な磐座と言ってさしつかえないことが判る。その頂上から西方の飯盛山をふりかえってみると、図Ｉ.9 のように、霊山飯盛山とそれに連なる山々が一望できる。春分秋分の日の入りは飯盛山から少し外れる（緯度がわずかに異なり、高い宝満山から低い飯盛山を見下ろすことになるから）が、それは無視しよう。そうすれば、飯盛山への入り日を拝んでいた吉武高木から宝満山の頂上に来た人は、飯盛山よりも高くて飯盛山の磐座よりもはるかに立派な磐座を見て、東方の宝満山こそ第一の霊山であると見なすことになっただろう。

現在宝満山は最高の誉めことばで呼ばれているが、その形から御笠山という別名もある（宝満山の神社は竈門神社と呼ばれているから、東西で相対している宝満山と飯盛山について、東の宝満山の「かまど」で「飯」を炊いて西の飯盛山に「盛った」という冗句が行なわれたのかもしれない）。ところで、竈門神社の上宮は頂上にあり、本殿である下宮はふもとにあるが、中宮のある峰が今は愛嶽と呼ばれている。宝満山は、漢字表記でそう書かれるようになる前、その名が御嶽であった可能性が高い。以下では強

調のため宝満御嶽という呼び名を用いることがある。

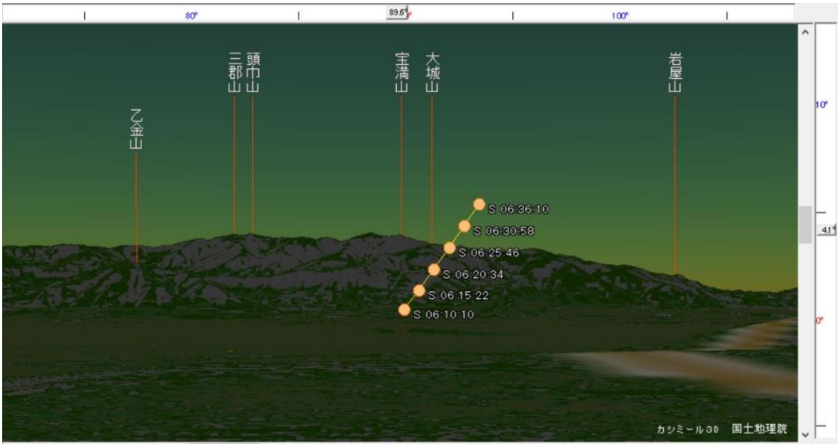


図Ⅰ.9 宝満山頂上から西方を望む（春分の日の入り）

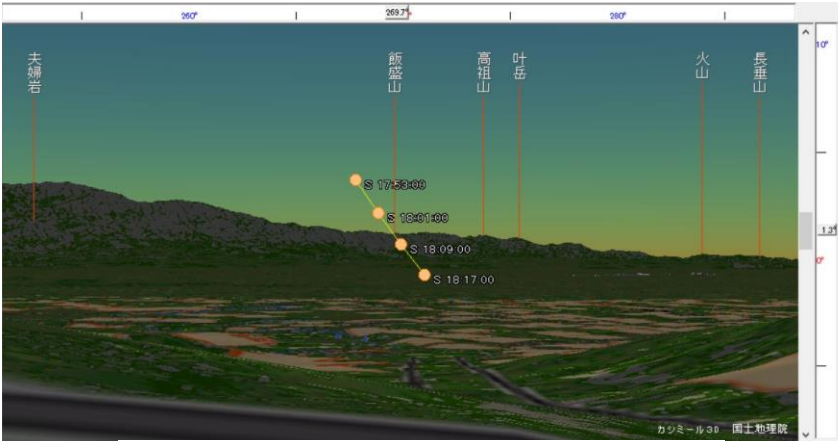
今度は須玖岡本遺跡のそばにある熊野神社から宝満山と飯盛山を見てみよう。まず、熊野神社の場所から宝満山がどう見えるか、カシミール 3D の仮想写真を図Ⅰ.10 に示す。熊野神社からなら、宝満山が手前の大城山（おおきやま）と区別できて、宝満山の峰がはっきり見分けられる。そして、春分秋分の太陽は宝満山の根元から出てくるように見える。それでは、西方の飯盛山を眺めるとどう見えるだろうか、図Ⅰ.11 に示そう。こちらでも、春分秋分の太陽が飯盛山の峰に入りこんでいくように見える。須玖岡本遺跡と熊野神社は、東西にちょうど霊山宝満御嶽と飯盛山の峰を見通すことができ、同じ春分秋分の日に太陽がその二つの霊山から出てまた沈むように見える絶好の場所なのである。その場所はそうなるように選ばれたにちがいない。それを可能にしたのは宝満山と飯盛山がきわめてよい精度で東西に並ぶという自然の偶然であり、王の統率する共同体がそう見える場所を中心に生活を営んだからだろう。

こうして、二つの弥生遺跡吉武高木遺跡・玖岡本遺跡とそこで生活を

営んでいた共同体が祭事を行なっただろう飯盛神社と熊野神社を結ぶ東西線が「太陽の道」として崇拝されたことが確認できる。

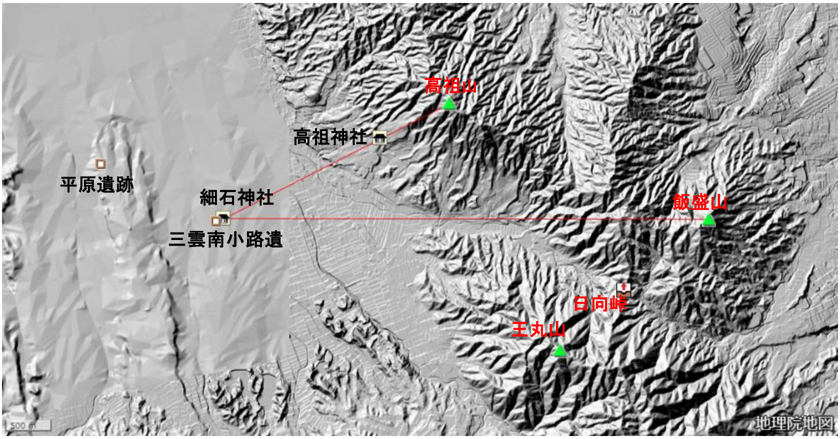


図Ⅰ.10　熊野神社から宝満山を望む（春分の日の出）



図Ⅰ.11　熊野神社から飯盛山を望む（春分の日の入り）

それでは、ダメ押しをするために、三雲南小路遺跡と細石神社に出向こう。それがどのような地形の場所にあるかを、図Ⅰ.12 に示す。この

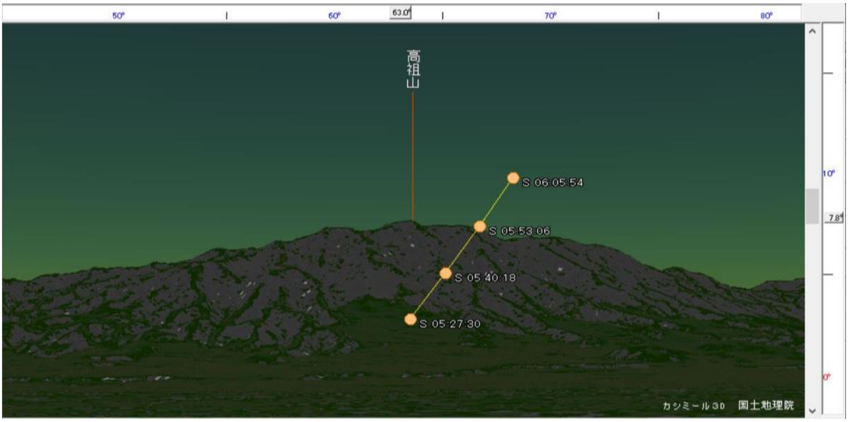


図Ⅰ.12　三雲南小路遺跡･細石神社･飯盛山･高祖山の位置図

地形図を見れば、細石神社が飯盛山の真西にあることが確認できるが、細石神社にカメラを据えて東方を写しても、手前の山にはばまれて飯盛山は見えないことが分る。

そこで、先に東北東にそびえる標高 416m の高祖山（たかす）にレンズを向けよう。得られる写真が図Ⅰ.13 である。見てのとおり、夏至の太陽は高祖山の根元から出てくるように見える。しかも、高祖山と細石（さざれいし）神社を結ぶ線はすぐうしろの三雲南小路遺跡に達し、この線上の高祖山山麓に高祖神社がある。この直線上の配列が意味深いことは、神社の祭神を知れば明らかになる。先走ることになるけれども、具体的に述べなければならない。細石神社の祭神は日の神の孫で高天原（たかまがはら）から地上に降りてきたとされる「ニニギの命（みこと）」の妻「木花咲弥姫（このはなのさくや）」で、高祖神社の祭神はニニギと「このはなのさくやひめ」とのあいだに生まれた「ヒコホホデミ」である。そのヒコホホデミを祀る神社が中国の王朝の始祖を意味する「高祖（こうそ）」という漢字で表わされていることは、ヒコホホデミがここの王家の始祖と目されていたことを示唆する。三雲南小路遺跡の二つの甕棺（かめかん）から出土した骨は男女だろうとされているのも意味深長である。日本神話で太陽神と孫ニニギから始まるとされる王家の始まりの説話

に関係づけられている細石神社と高祖山を結ぶ直線は、夏至の日の出を飾ることで「太陽の道」と考えられていたとしてよいだろう。つまり、三雲南小路遺跡と細石神社を残した共同体は、太陽の道の観念を尊重していたのである。



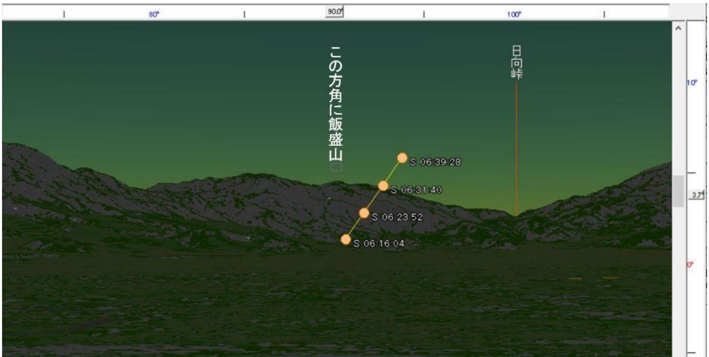
図Ⅰ.13　細石神社から高祖山を望む（夏至の日の出）

吉武高木遺跡で“最古の王墓”ということばが用いられたことから判るように、三雲南小路遺跡はそれよりも新しいと考えられる。すると、三雲南小路遺跡を残した共同体の人々は、飯盛山と宝満御嶽を結ぶ「太陽の道」の観念体系を知っていたということになるだろう。そうだとすれば、そこから東方にある霊山飯盛山に無関心であったとは思われない。高祖山—細石神社を結ぶ太陽の道を崇拝するときに、飯盛山の位置に関心を向けたに違いない。どうすればよいだろうか。

方位を求めるのに古代人にできたことは、日時計のように棒を鉛直に立て太陽が南中（なんちゅう）して日の影が最も長くなる方向から南北を決め、それに垂直な方向を東西とすることである。ここまで議論してきた太陽の道が現代人から見ても精度がよいのは、標識となる自然物が偶然にもよい精度で東西に存在し、直視で

きたことに負っている。琉球の王権が制定した太陽の道でも、王宮から遠い両端の標識を直視できた。一つの例外は、細石神社から霊山飯盛山を直視できないことである。それなのに細石神社と飯盛山は精度よく東西線上にある。

そうするには測量するしか方法がなかっただろう。――三雲南小路遺跡が示すほどの文明に達していた人は、東の山に分け入って飯盛山が見える尾根（図Ⅰ.12）に登っただろう。その尾根で数日かけて、東西方向を見通す照準棒つきの日時計で真東に飯盛山が見える場所を探す。そして、そこに旗差しものを立てる。こんどは三雲南小路で、同じ照準棒つきの日時計で真東にその旗差しものが見える位置を探せば、宝満山—飯盛山を結ぶ東西線の延長線を引くことができる。その延長線上で夏至の日の出が高祖山から昇るように見える場所を選べば、そこが春分秋分の太陽の道と夏至の太陽の道が交差する地点である。三雲南小路遺跡付近には古い遺跡がある。その共同体の人たちは、そのようにして細石神社の場所を決めた、――とわたしは推測する。念のために、細石神社から春分秋分の日の出がどのように見えるかを、カシミール 3D で描くと図Ⅰ.14 のようになる。ここで仮想カメラは方位角 90°の真東に向けてある。



図Ⅰ.14　細石神社から見る春分秋分の日の出

出来すぎかもしれないが、実際に図Ｉ.14 のようになっているから、これが一番合理的な理解だと思う。というわけで、宝満山―飯盛山を結ぶ太陽の道は細石神社まで達している、と筆者は考える。古代人が「太陽の道」を決定するときこのような観測を行なったというアイディアは、文献[(2)]で水谷慶一が提起している。その観測が、今の事例ではわりあい容易に精度よく実行できたはずである。

先ほど吉武高木遺跡のところで、太陽の道について重要なろこととして、④～⑥の論点を提出した。三雲南小路遺跡と細石神社についての考察は、⑦ 目立つ山を標識として「夏至の太陽の道」が設定された、というもう一つ重要な論点を導く。そうすると、同様に目立つ標識があれば「冬至の太陽の道」も設定されたかもしれない。前著では、図Ｉ.12 に書きこんだ細石神社の東南東にある王丸山がそうかもしれないと書いたが、そこで述べたように、カシミール 3D で描いた仮想写真も冬至の日の出が王丸山からかなり外れることを示す。図Ｉ.6 でも、須玖岡本遺跡から冬至の日の出の標識となりえる宮地岳を書き入れたが、弥生時代の「冬至の太陽の道」を強く主張することは本書では控えよう。

細石神社から見て高祖山を標識とする夏至の太陽の道があったという結論は、神話を解釈するのに有効な手がかりを与える。吉武高木遺跡そばの霊山飯盛山のふもとにある飯盛神社に関連する似たことはないだろうか。飯盛神社のホームページは、ここの主祭神はイザナギで東方若杉山のふもとの太祖神社に祀られているのが夫のイザナギだ、この関係は由緒の古いものだ、と書いている。そこでカシミール 3D で調べてみると、残念ながら夏至の太陽は、図Ｉ.6 と図Ｉ.8 で北に描かれている若杉山のさらに北側の長い山すそにある太祖神社よりももっと北から昇ることが分る。太祖神社は精度よく夏至の方角にあるのではない。それでも、飯盛山のふもとの飯盛神社と若杉山の北側の長い山すそ

にある太祖神社とに、日本神話で重要なイザナミ・イザナギの夫婦神が祀られているということは、社が築かれるようになった時代に神話として公認された、と推定させる。イザナギが祀られている神社の名が「高祖」よりもさらにたいそうな「太祖」であることも見過ごしにできない。飯盛山の東方に連なる山々のうちで最も重要な宝満山御嶽のほかに、もう一つの標識の山として若杉山が注目されたのは、神話の説話に関係していて、すくなくとも「太陽の道」の観念に広がりをもたせる機運はあったのだろう。うしろの章でまた述べるが、宝満山と若杉山は、後世修験道のさかんな山となった。若杉山のふもとの太祖神社のある篠栗では今でもお遍路が集う。アニミズムの崇拝が神社信仰さらに神仏習合へ発展する歴史を想定することができる。飯盛山も同種の歴史があった。こちらでは神仏習合の社寺となって中世まで続いた。

次に須玖岡本遺跡そばの熊野神社でこの問題を考えると、興味深いことが知られる。熊野神社の祭神はイザナギ・イザナミの二人なのである。歴史的に観れば、飯盛山と若杉山にいた夫婦神をいっしょに祀ったことは、「太陽の道」の形式上の進化をうかがわせる。須玖岡本遺跡とそばの熊野神社ではすぐ近くに見える宝満御嶽が重要視されたはずだが、おおよそ冬至の方向にある山が意味ありげな宮地岳という名で呼ばれている。先ほど強くは主張しないと言ったけれども、「太陽の道」という観念を、春分秋分の東西線だけでなく、夏至と冬至の方角にも想定する志向があった、と考えてよいだろう。

今上で考えたことは、神話の説話にも発展史があっただろうことを示唆する。その発展史をさかのぼって神代に近づいてみよう。すでに図Ⅰ.5 のところで国生みの最初に出来た「おのころ島」が小呂島だろうとしたが、図Ⅰ.6 に、イザナギ・イザナミの生んだ海(わたつみ)の神・筒男(つつのお)の神・山(やまつみ)の神を祀る神社を書き入れてある。海神は博多湾北の志賀島の海(わたつみ)神社に、筒男(つつのお)の神（イザナギが死んだイザナミを黄泉(よみ)の国に尋ねた

あと立ち戻った浜辺で生まれた）は古代海辺にあった住吉神社に、山の神はこの地図中で最高峰の背振山の頂上近くの山(やまつみ)神社に祀られている。神話で海(わたつみ)の神と筒男(つつのお)の神は、それぞれ三柱(みはしら)の神とされているが、福岡の海神社と住吉神社はそれぞれ、三人の神たちのために三棟の社をもつ。この建築様式の発祥はここだと考えられている。こうしたことはみな、日本神話が図Ⅰ.6の領域で生まれたことを強く示唆している。それらの神々を生んだイザナギ・イザナミが図Ⅰ.6 中の太陽の道に関係していて、その太陽の道が宝満山と飯盛山という自然物によって設定され、弥生時代人たちがそれを崇拝したことを三つ遺跡が証言しているのである。日本神話は日本列島で最初に文明の進んだこの領域でつくられた、と結論してよいだろう。

蛇足をまたつけ加えれば、月も、日の神や海の神・筒男の神・山の神といっしょに生まれたとされているので、月の神を主神とする神社を図Ⅰ.6 中に探したが見つけることはできなかった。Wikipedia「飯盛神社」が、「主神がイザナミ、東王子が天照(あまてらす)大神、西王子が月読(つくよみ)大神」と書いている。天照大神とは日の神のことだから、ここでは日と月の神が祀られているのだ。飯盛山には太陽だけでなく月も沈むのだからそれでよいのかもしれない。東の宝満山の竈門神社には日と月の神のことが書かれていないが、東王子の日と西王子の月を東と西の二つの山に配置して、宝満山に日を飯盛山に月を祀るのがふさわしいと考えるのは我田引水だろうか。

閑話を続けると、図Ⅰ.6 の福岡市東部に立花山(たちばなやま)を書き加えた。この山は古くは二神山(ふたがみやま)と呼ばれていたと伝えられている。二柱の神とはイザナギ・イザナミのことである。古い説話では、こちらの山がイザナギ・イザナミの居場所だと語られていたのかもしれない。古事記の説話が、黄泉(よみ)の国から帰ってきたイザナギが「筑紫の日向の橘(たちばな)の小戸(おど)の阿波岐原(あはきはら)」でみそぎをして日・月などを生んだとするが、そのたちばなと立花(たちばな)山とが関連づけられたということかもしれない。たしかに、海辺に近く福岡市の海岸一帯で最

も目立つ立花山はイザナギの説話にふさわしいように見える。社を建てるようになったころ、神話は整理されて、親神とその子たちを図Ⅰ.6 中に配置しなおすことが行なわれた、と考えることができる。

神話を太陽の道と結びつけて考えると、高天原の神々のうち最重要なイザナギ・イザナミ神の夫は若杉山に妻は飯盛山に、その子の日の神は沖ノ島一ノ岳に、そして、地上の王の始祖（中国流に高祖（こうそ））とも想定されるヒコホホデミは高祖山に配置されている。さらに、ヒコホホデミの母「木（こ）の花の咲くや姫」の父山（やまつみ）神はこの地域で最高峰背振山に、海にいる海（わたつみ）の神や海の中にいる筒男（つつのお）の神もそれぞれ地上の見える場所にいるとされている。神話の説話を語り合った話者たちは、まるで地図Ⅰ.6 を頭に描きながらジグソー・パズルを楽しんだかのようである。では、『古事記』で高天原から“筑紫の日向の高千穂のくしふる岳に降りてきた」とされる日の神の孫ニニギは、どの山に降臨したと想定されただろうか。糸島市の古文書に高祖山の南の山にその名の山があると書かれているそうだが、図Ⅰ.12 で引いた東西線上で細石神社から見える飯盛山西側の峰のことだろう。その伝承は『古事記』に影響された可能性があるが、ここまでの議論からすれば、神話の話者たちは「くしふる岳」（「くし」は神秘的という古語「奇（く）し」だろう）のピースを宝満御嶽に割り当てた、とわたしは推測する。

今した想像は、神話の発展ということを考慮に入れており、神話を構成するある一つの事項をうまく説明して終わるのではなく、いくつもの事項の解釈がそれぞれ名や地理や地形などについて根拠をもち、それら全体が関連して説話を総合的に解釈可能にするという点で、優れている。本書はこれ以上神話に踏みこまないが、日本神話をさらに研究する糸口は得ることができた、と思う。日本神話の起源とその後の変遷については、近代までの通時的な考察を電子書籍(5)で試みた。

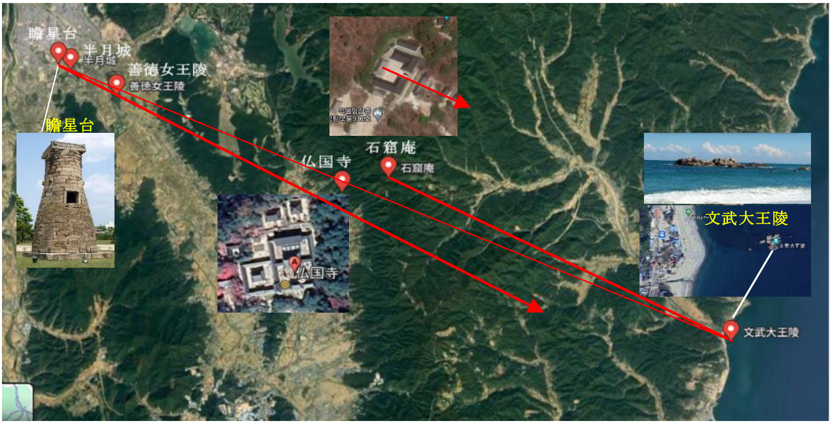
ⅳ．600 年代後期の朝鮮半島の「太陽の道」

> 昔、NHK の番組（ディレクターは文献(3)の著者水原）が、朝鮮半島の東岸で地先の島から昇る朝日を拝む場所を放映した。2018 年に新羅と百済の古都を巡ったわたしは、そういう名所の一つを見物し、さらに、新羅の古都慶州郊外にある吐含(とがん)山（標高 745m）の山麓と中腹にある二つの世界文化遺産の仏教寺院仏国寺と石窟庵を訪れた。中腹にある石窟庵の方はすべて石造りの見事な建造物である。後方のドームに如来像を、方形の前室に多数の仏像を安置している。東の海を臨む場所にあり、ツアー・ガイドの説明では、如来像の額のガラス玉が冬至の朝陽に照らされると光るという。きっと「太陽の道」に関係していると思われた。

帰国後 Google map で調べると、たしかに、この前方後円形の寺院は冬至の日の出の方角に向いて建っているようだ。建物の中心軸の方向をたどっていくと、海岸に出て沖合に岩礁がある。書き入れてあるハングルを漢字に変換して驚いた。そこは文武大王陵なのだ。すなわち、朝鮮半島を統一した新羅の文武王の墓である。その文武大王陵と、新羅の都にあって関係すると考えられる三つの遺跡および仏国寺と石窟庵の二つがどのような配置にあるかを示すと、図Ⅰ.15 が得られる（便利な日本の地理院地図は外国の拡大地図を出さないので、Google map で得た地図に Word のツールを使って補足してある）。

文字が見えにくいが、六つのアイコンは歴史的建造物と遺跡を示す。西から順に、瞻星台(せんせいだい)・半月城・善徳女王陵・仏国寺・石窟庵そして文武大王陵である。善徳女王とは新羅で初めての女性王で文武王の三代前の王で、半月城址にはこれら新羅王の王宮があった。善徳女王の在位は 632～647 年、文武王の在位は 661～681 年（生年 626-681 年）である。文武王の 661 年の即位の背景には、唐軍が百済を滅ぼしたさい軍を率いて参戦した父の武烈王が、翌年 661 年にも唐の高句麗侵攻に参陣し陣中で病死したという東アジアの国際情勢がある。瞻星台とは

星を見る天文台を意味する（Wikipedia はそれがどんな施設だったか詳細は知られていないと書く）。文武大王陵は、瞻星台から距離 26.4km のところに、石窟庵から距離 13.8km のところにある。



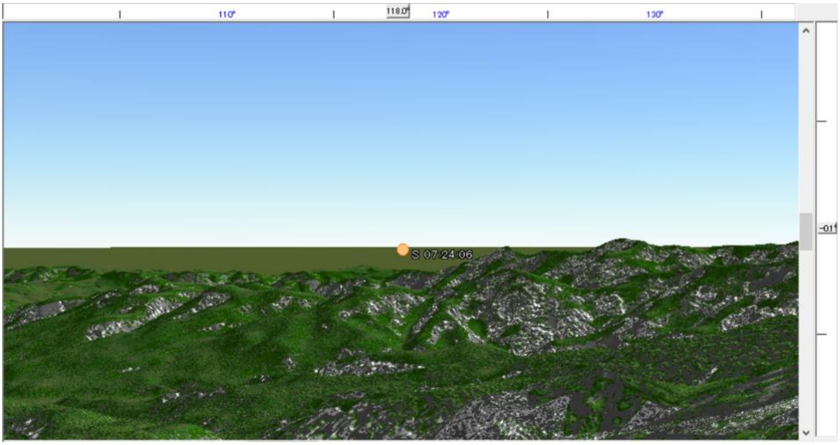
図Ⅰ.15　新羅で制定された二つの冬至の太陽の道

Wikipedia と関連する web サイトを参照すれば、仏国寺は 500 年代に創建され（『仏国寺古今創記』が創建を 528 年と書く）、石仏寺＝石窟庵は仏国寺の再建に合わせて創建されたようだ。工事は 751 年に始まり二つの寺は 774 年に完成したらしい。石窟庵の建物と一番奥に置かれた如来石仏像は、文武大王陵の方向に向いている。また、図Ⅰ.15 は、瞻星台・半月城・善徳女王陵の三つの建造物が意図されたことのように直列していることを示す。そこに描かれた二つの赤い直線はここまで考えてきた「太陽の道」と考えてよいだろう。

石仏寺（石窟庵）は、冬至の日の出に関連づけて語られる点で、太陽の道の考察にとって見逃せない。創建とされる 751～774 年は文武王が亡くなった 681 年から年月を経ている。しかし、その建物が文武大王陵に向かって建てられ奥に安置された

本尊の如来像もそちらを向いているとすれば、石仏寺は文武王を供養するために建てられたのである。そう考えるわたしに石窟庵から文武大王陵が見えるかという問いが生まれた（そこを訪ねたときにそんな考えは思い浮かばなかった）。インターネットで探索したら日本の旅行者が写真を添えてそれに答えていた。撮影者は、“彼方の山々の切れ間に文武大王陵が見えるというが、目の悪い自分には見えなかった”と言っている。

標高 566m にある石窟庵から文武大王陵が直視できるということだろう。しかし、ハングルを解さないわたしは、それを文献で確認することができない。それに、冬至の日に太陽がその方向から昇ることも確認しなければならない。Google map の平面図Ⅰ.15 で方角を測ると、石窟庵と文武大王陵とを結ぶ直線は東西方向に対して約 28 度である。カシミール 3D で確かめてみなければならない。焦点距離 50mm の仮想カメラを 28 度＝北を基準にした方位角 118 度（水平面から 0.14 度下方）の方向に向けて得られたのが図Ⅰ.16 である。地理院の地図データが使えないから、JAXA からダウンロードした「ALOS 全世界標高データ(30m メッシュ)」



図Ⅰ.16　石窟庵から文武大王陵の方向を望む(冬至の日の出)

を用いた。先ほどの旅行者のカメラはもっと北寄りに向いていて、その人に文武大王陵の方角を教えた人も正確には知らなかったようだ。

図Ⅰ.16 は、たしかに冬至の朝日が、文武大王陵のある方位角約 118 度の方向の水平線上に現われることを示している。ところが、肝心の文武王の葬られた岩礁が写っていない。石窟庵が標高 566m の高所にあり海辺のその岩礁まで 13.8km も離れているとしても、見通すことができないのではないか。水平面から何度下方に位置するか概算すると、－0.566/13.8×57.3≈－2.35 度。図Ⅰ.16 は、細部を示せていないが、その岩礁手前の尾根は角度にして-2 度よりも上方に出ていると教える。もともと文武大王陵の岩礁は見えないのだ。石窟庵の位置から見て冬至の日の出が岩礁の方から昇るのを確証したいが、古代の新羅人はどうやって確認したのだろうか。前節iiiで推測した方法か火を燃やし狼煙(のろし)を上げるなどの方法で観測し、石仏寺（石窟庵）の建設者や王臣たちはそれを確信することができた、と思われる。

われわれは文武大王陵―石仏寺を結ぶ線を「冬至の太陽の道」と呼ぶことができる。この太陽の道では、文武大王陵の岩礁が沖ノ島や久高島のような日の宿る“島”であり、吐含山は長門二見夫婦岩背後の御嶽や琉球の斎場御嶽のような御嶽と言える。長門御嶽の陰陽石のある場所に建てられた寺のように、石仏寺は標高 745m の吐含山の頂上よりも低いところにある。ツアー・ガイドがそこの清水を飲むと健康になると言ったから、霊所と見立てることのできる泉でもあったのだろうか。それとも、石窟庵の石窟自体が磐座と見立てられたのだろうか。

それにしても、百済・高句麗の旧領を併合して大王と呼ばれるようになった文武王の陵が、図Ⅰ.15 の添付図が示すように人家も少ない海岸の沖合にある岩礁に置かれたのはなぜだろうか。人々がその岩礁の向こうから昇る太陽を拝んでいたというような古い由緒のある霊所でな

かったら、文武王がそこに葬られることはなかっただろう。同じように、金印の出土した志賀島のへんぴなあの場所も、人々が霊山宝満山から冬至の朝陽が射し込む霊所と考えたのでなければ、王が金印といっしょに葬られることを望むことはなかっただろう。700 年代の文武大王陵と石仏寺を結ぶ冬至の太陽の道が、１世紀の倭国で宝満山と金印出土地を結ぶ冬至の太陽の道がありがたがられたことを追認している。

以前、新羅の都と仏国寺と文武大王陵とを結んでみると直線上にあり、それが冬至の太陽の道ではないかと考えたことがあった。その図を人に見せたこともあった。しかしそれは、探求が足りなくて、瞻星台と善徳女王陵に気づかなかったせいである。

瞻星台と善徳女王陵に気づいて地図に書き入れると、仏国寺や文武大王陵と直列していないことが分かった。そこで、うしろの二つを切り離して瞻星台・半月城・善徳女王陵だけに注目すると、三つは拡大図でもよい精度で直列する。それが図Ⅰ.15 で一番下に示した矢印である。この矢印の方向を平面図Ⅰ.15 で測ると東西線に対して約 28 度傾いている。この直線が石窟庵と文武大王陵とを結ぶ直線と平行なことは図を見ても分かる。これを太陽の道と呼べることが、以下の議論によって明らかになる。

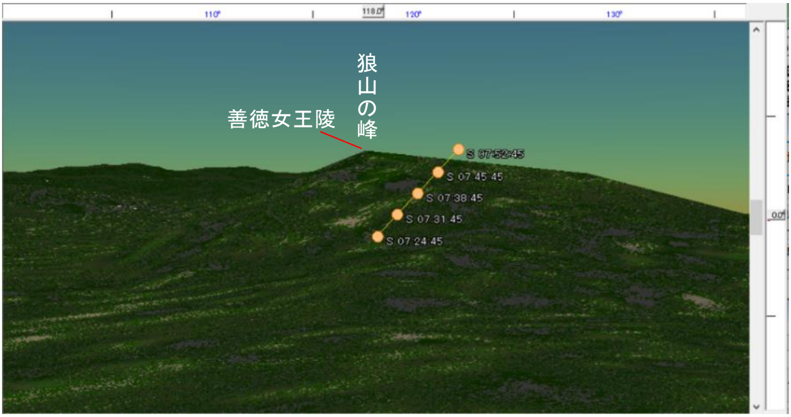
矢印の基点にある瞻星台（せんせいだい）は、古代中国で天文観測を行なった観星台に相当する（漢字「瞻」の意味は「観」に等しい）。観星台の前身は測影台である。伝説が、周の周公が天地の中心を定めようと日陰の長さを測ったと言う（つまり日時計）。中国は古い時代からずっと天文観測を行なったことで名高いが、他方で道教的な宇宙観があり、漢の都長安には天帝を祀る円丘(天壇（てんだん）)が都の南郊につくられ、霊台(天文台)も設置された。天壇と霊台を都のどこに配置するかは古代中国ではおろそかにできることではなかった。こうしたことからすれば、新羅の瞻星台も

どこに設置するかは考慮されるべきことであった。『三国遺事』によれば、その瞻星台を築いたのは善徳女王だという。図Ⅰ.15 の添付写真が示すように、現在も石造りの瞻星台は王宮半月城の西北西約 500m のところに立っている。天文台は霊台とも呼ばれ関連する天壇も霊的なものと意識されたはずだから、それが太陽崇拝に結びつけられて太陽の道の基点に置かれたのは理解しやすい。

600 年代の善徳女王は、瞻星台を築いたとき霊廟寺という寺を建てたと伝えられている。寺の名からみて、仏教寺院も霊的なものと考えられたのである。のちの 700 年代に石仏寺＝石窟庵を建て文武大王陵と結んで太陽の道とされたことがうなずける。仏国寺は 500 年代に創建されたとされているが、その時代にはまだ寺院を太陽の道に結びつけようとすることは行なわれなかったのだ。

新羅で太陽の道という観念がはっきりと具象化されたのは、善徳女王が亡くなって王陵が瞻星台—王宮半月城を結ぶ線を延長した東南東 1.93km のところに築かれたときである。瞻星台の場所の標高は 47m、半月城の標高は 52～60m、善徳女王陵は標高約 93m の小山の頂上に築かれている。三つの場所は近いので、王宮半月城で瞻星台と善徳女王陵が直列することは目視で確かめられたはずである。Google map を拡大すると、善徳女王陵が置かれた山には狼山という名があることが知られる。狼山は、王宮から見て冬至の日の出が昇ってくる標識の山だっただろう。カシミール 3D で王宮半月城南の丘から狼山に昇る冬至の日の出を写すと、図Ⅰ.17 に示す仮想写真が得られる。

この図は、新羅にも九州北部と同種の陸の太陽の道という観念があったことを証言している。2km 足らずにある小山から出る日の出が、王家の人たちに、太陽が顔を出す場所を変えて四季の移り変わりを教えただろう。とくに冬至の日の太陽は狼山の根元から出てくるように見えて、春の訪れを待つようにしたことだろう。狼山は「太陽の道」の



図Ⅰ.17　新羅王宮南の丘から狼山を見る（冬至の日の出）

親しみ深い標識の役目を果たしたのだ。だから、瞻星台―王宮半月城―善徳女王陵を結ぶ直線を、石仏寺―文武大王陵を結ぶ直線と同様に、冬至の太陽の道と呼ぶことができると言ったのは正しかったのである。むしろこちらの方が最初に設定された「太陽の道」だった。石仏寺は、新羅にとって偉大な文武大王の陵を王宮を通る冬至の太陽の道と同じ観念様式で崇めるために築かれた、と言うことができる。このとき、仏教寺院が「太陽の道」に関係づけられたことは、あとの章の考察を助けるだろう。

瞻星台の高さは 9.1m あるという。天辺（てっぺん）から見れば、王宮と善徳女王陵が直列していることが確認でき、王宮の先の狼山は図Ⅰ.17 よりも小さく見えるが、図Ⅰ.17 のような冬至の日の出が観察できたはずである。もちろん、瞻星台で四方の山々と天空の日・月・星辰を観測しただろう。

新羅最初の太陽の道には、⑥´王宮があり、⑦ 目立つ山を標識とし、④ 王を埋葬し、さらに、⑤´霊を崇める社に当たる天壇つまり瞻星台が置かれた。それは、善徳女王の時代に行なわれたから、⑧ 王が制定したと言える。さらに言えば、それが女性王によって行なわれたことは、

⑨ 善徳女王がシャーマン的な立場にあっただろうことを示唆する。あとで制定された「太陽の道」上には、① 日の出を拝む地先の岩礁があり、③ 御嶽に相当するような山に石窟庵が築かれた。こうして、新羅の「太陽の道」は、第ⅰ～ⅲ節で見出された太陽の道の要件①～⑩をほぼみな満たしていることが確認できた。それらに加えて、⑪ 新羅では冬至の太陽の道が設定された、と言える。

さらに、新羅の太陽の道には、⑫ 中国式の天を敬う思想が取り入れられ、⑬ 伝来した仏教の寺院が「太陽の道」上に建設された。

こう考えてくると、王宮近くに建てられた瞻星台が果たした役割が明らかになる。Wikipedia「瞻星台」は、“1996 年に開かれた第 9 回国際東アジア科学史会議で、瞻星台で何らかの天文観測が行われたかもしれないという点で史学者の間に意見の一致が見られた”と書くにすぎない。だが、太陽の道の観点からすれば、そこでは春分夏至秋分冬至の日の出の方角が観察されたと推定できる。周公の測影台と同じく日の影によって南北東西を求めたと考えられる。漢の時代の日月星を観察する天体観測器渾天儀(こんてんぎ)とまでいかなくても、時代が進んだ 600 年代の新羅の瞻星台では少なくとも日時計に分度器を加えた“測影器”を置いて方位を観測した、と推測できる。そう考えれば、瞻星台が太陽の道の中心に置かれたことがよく理解できる。

中心に置かれたとすれば、善徳女王陵から瞻星台へ延ばす直線の向かう先の西方には山々があるから、そのなかで目立つ山が東方の狼山のように特別な標識として選ばれただろう。残念ながらハングルを解せないわたしには山の名を調べることができない。思索はまた、文武王の遺体は本当に荒波の寄せるあの岩礁に葬られたのだろうかという疑問を生じさせた。だが、疑問は論文(6)によって否定された。当時としては異例なことだったのだが、遺言によって遺体は火葬され遺灰が岩礁に葬られたらしい。その論文は現在の岩礁の状況を記していて、少なく

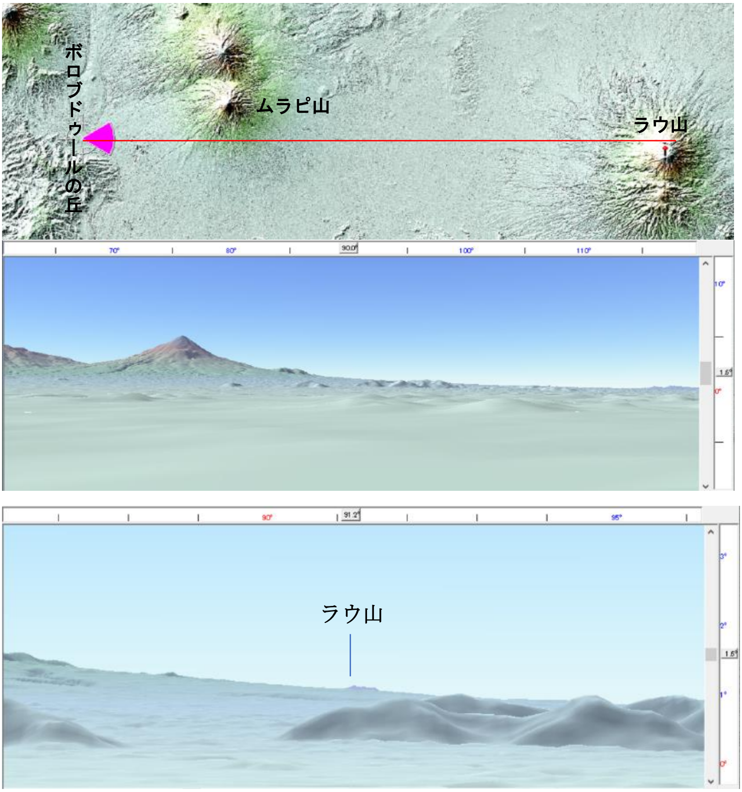
とも“石棺様の岩体が海水に浸かっている状態で現存している”という。

ｖ．700 年代にジャワ島で設定された「太陽の道」

太陽崇拝は世界中にあり、二至二分の日の出日の入りに関心を寄せた遺跡が各地にある。極東アジアの倭や琉球や新羅の太陽崇拝の様式「太陽の道」がほかの土地にもあるかもしれないとかねがね思っていた。そういうなかで、インドネシアのボロブドゥール遺跡に立ってムラピ山を眺めた服部英二の美しい文章[7]に出会った。「何故この地に建てられたかを悟った」、「ムラピ火山の真後ろから太陽が昇るのを見られるのがこの丘なのだ」と書いている。太陽の道と関連がありそうだ。その詳細は別のところ[8]で書いたので、要点だけを簡潔に述べよう。

ボロブドゥール寺院について勉強したら、東西・南北を中心軸とする基壇・五層の方形壇・三層の円形壇をもつ建物が曼荼羅（まんだら）を表現し、方形壇第四回廊の四面の浮彫が密教の「大日如来（だいにちにょらい）」だという。大日如来は「華厳経（けごんきょう）」では毘盧遮那仏（びるしゃなぶつ）といい、「光明遍照（こうみょうへんじょう）」という意味をもち太陽を象徴している。

Google map を開いて地理を調べた。2020 年にも噴火した活火山ムラピ山は標高 2930m でボロブドゥールから東北東 27.7km のところにそびえている。さらに地図を調べると、ボロブドゥールの東方はムラピ山の溶岩流と思われる山裾が広がっているほかはとても広い平野で、約 109km 東に行ったところに標高 3265m のラウ山というのがあった。単独峰をなすこの火山も霊山とされているそうだ。そこで、ボロブドゥールの丘と二つの霊山ムラピ山・ラウ山の地理関係、および、ボロブドゥールの丘から東方がどのように見えるか、カシミール 3D で「ALOS 全世界標高データ(30m メッシュ)」を用いて描いたら図Ⅰ.18 が得られた。地形は単純明快で、ボロブドゥールの丘に立って東方を眺めれば、季節ごとの日の出が雄大な光景をくり広げることが読みとれる。



図Ⅰ.18　ボロブドゥールの東方の地形とそこからの眺望

図Ⅰ.18 の真ん中の図は、焦点距離 50mm のレンズで写した仮想写真だが、ラウ山が見分けられない。そこで、レンズを 200mm の望遠レンズに交換して拡大したら、図Ⅰ.18 下の図のようにラウ山の頂上が見える。念のために 100mm の望遠レンズで確かめたら、そこでもラウ山を見分けることができた。大自然で暮らす人がおどろくほどの視力をもつことを参考にすれば、視力のよかった古代人のうちに肉眼で地平線の向こうにラウ山の峰を見分ける人がいてもおかしくない。補足すれば、現在のラウ山の山頂は噴火によって崩落しており、古代にはもう少し見えた可能性がある。そうでなくても噴煙が上がればそこに火山が

あることが判る。だから、ラウ山は見えたと結論することができる。

図Ⅰ.18 でカメラは、方位角ほぼ 90 度のラウ山の方向に向けられている。この図からすると、朝日は、おおよそ春分から秋分までラウ山より北側のムラピ山塊の背後から昇り、秋分を過ぎたころから春分ころまでラウ山より南側のわずかな傾きしかない地平線の向こうから昇る。ラウ山は、春分・秋分の節目を教え、一年を夏期と冬期とに二分する標識となるのである。

ところで Wikipedia によれば、ボロブドゥール寺院を建造したのは、ジャワ島中部を支配したシャイレーンドラ朝(8 世紀半ば～9 世紀前半)で、寺院は 780 年～792 年ころ完成したらしい。当時世界最大級の精巧を極めた石造寺院だった。寺院から南南東約 28.2km に古都ジョグジャカルタがある。これらを総合すると、ボロブドゥール寺院は、王権によって、霊山ムラピ山のふもとでもう一つの霊山ラウ山を真東に見ることのできるその丘を選んで建造された、と考えてよいだろう。それは、ボロブドゥール寺院とラウ山を結ぶ東西線を太陽崇拝の象徴として公式に認定したということである。われわれのことば使いをすれば、ボロブドゥール寺院とラウ山を結ぶ東西線が王権によって「太陽の道」として制定されたのである。

補足すれば、中国の史書に「訶陵」という国から唐への使節が 640 年～870 年ころ 12 回来たと記録されていて、地理の記述からするとその国はジャワ島にあったらしい。同じ時代、日本と新羅も遣唐使を送っていた。ちなみに、東大寺大仏（毘盧遮那仏）の開眼供養は 752 年に行なわれ、かなり大きな如来像が本尊の石仏寺は 751～774 年に建造された。ボロブドゥール寺院は、唐を仲立ちとする広域の文化的影響下で、東大寺や石仏寺とつながりがあっただろう。ジャワ島からの遣唐使は、日本と新羅の光明遍照仏のうわさを唐の都で聞いたかもしれない。

vi．「太陽の道」がもつ特徴のまとめ

この章の終わりに、第ｉ～ⅳ節で得られた「太陽の道」を特徴づける要点もしくは要件を箇条書きにして整理しておこう。

① 太陽の道という観念は、地先の岩礁や島からの日の出と日の入りをありがたく思うアニミズムの心性から始まった

② 春分秋分の太陽の道は、日の出と日の入りを印象深く見せる自然物を標識として指定され、海岸で標識となる陰陽石や対の島を夫婦岩あるいは神ノ島と呼んだ。

③ 夫婦岩のある海岸の背後にあって太陽の宿る島を見晴らせ、磐座（いわくら）と見なせる陰陽石のある山を御嶽（おだけ）と呼んだ

④ 王を神聖な「太陽の道」上に埋葬しようとした

⑤ アニミズム的心性が「太陽の道」上に霊的な社（やしろ）を築かせた

⑥ 王は住居（のちには宮殿）を「太陽の道」上に築こうとした

⑦ 地理が適合しなければ、東西線ではない太陽の道が選ばれた
目立つ山を標識として「夏至の太陽の道」も設定された

⑧ 王が出現すると太陽の道を公的に制定し主宰した

⑨ 王家の女性が太陽の道にまつわる宗教的儀礼においてシャーマニズムでいう巫女の長を務めた

⑩ 時代が進むと、太陽の道という観念は国家統治の一翼を担い、祭政一致の国家制度をつくりだした

新羅では

⑪ 冬至の太陽の道が設定された

⑫ 中国式の天を敬う思想が取り入れられ、瞻星台（せんせいだい）が築かれた

⑬ 伝来した仏教の寺院が太陽の道に置かれた

これら太陽の道の要件は、第二部で具体的に歴史を考えるときに援用できる論拠となるだろう。

参考文献

⑴ 谷川修『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』, 白江庵書房, 2021 年.

⑵ 小川光三『大和の原像―知られざる古代太陽の道』, 大和書房, 1985 年.

⑶ 水谷慶一『知られざる古代』, 講談社現代新書, 1980 年.

⑷ 杉本智彦『カシミール 3D GPS 応用編』, 実業之日本社, 2014 年,
最新版ソフトウェアはインターネット上のホームページ.

⑸ 谷川修 電子書籍『日本神話の起源と変遷』, 白江庵書房, 2022 年.

⑹ 小林健彦 「新羅国の文武王と倭国」, 新潟産業大学経済学部紀要, 第 43 号, 2014 年.

⑺ 服部英二 『転生する文明』, 藤原書店, 2019 年.

⑻ 谷川修 http://hakkoan.net/蝶の雑記帳, 「85 ボロブドゥール寺院の太陽の道」, 2019 年.

2024 年 6 月夏至　　　　　　　　　　　　　　海蝶　谷川修